

10. 地球の危機を救え

敦賀市立敦賀南小学校

6年 竹本 怜央



各務原市立陵南小学校

6年 大西 果乃莉 紅谷 枝英理 森田 詩織

二〇六六年、この星地球は、地球温暖化によって、ついに住むことが難しくなった。人々は、酸素マスクをつける生活をよぎなくされた。それは、植物が激減したからである。つまり二酸化炭素を吸って、酸素を出す木が減ってしまい、酸素が無くなりそうなのだ。

この環境の中に、一志、恵一、優太の仲良し三人組がいた。この三人は、今から一志のおじいちゃん、鉄矢博士の研究所へ遊びに行く途中だった。歩いていると、恵一が話し始めた。

「なあ一志、この地球あとどれくらいもつと思う」

すると、一志がおこり口調でこう言った。

「何言ってるんだよ。おれらの目的は、地球をよみがえらせることなんだぞ。だからじいちゃんに相談に行くんじゃないか」

「あ……ごめん」

恵一は、少ししょんぼりしたような顔をした。

運動好きの優太が言った。

「おれらが小学校三年の頃、そう、三年前に、走ってはいけないということが義務づけられたよな。二酸化炭素が多く出るからって、それはないよな。特にこの運動好きなおれにとっては……くそっ」

「同感だぜ」

二人が声をそろえて言った。ああだこうだ言っている間に、鉄矢博士の研究所の前まで来ていた。

研究所の中に入った三人は、マスクをとった。建物内は、酸素がたくさんあるからである。入ると、鉄矢博士がやって来た。

「おお、よく来たのう。ところで一志、何をしに来たんじゃ」

「ちょっと、じいちゃんに相談したいことがあってさ」

「相談……それは何かのう」

「実は、この地球をよみがえらせたいたんだ。おれら三人は、とっても地球が好きなんだ。このまま別の星に行くなんてことがあったらいやなんだ。だから、じいちゃんに相談をと思ってさ」

すると、鉄矢博士が笑いながら言った。

「おまえ達、なんてタイミングがいいんだ。わしも一志と同じことを考えておった。じゃから開発したのが……」

鉄矢博士は、後ろのカーテンを開け、

「このCO₂クリーンマシーン」

と、さげんだ。

「おお、じいちゃんすごいや。でもなんで動かさないんだよ」

「実はなあ一志、このマシーンには、材料が必要なんじゃ。まずは木、次にきれいな井戸水、そしてスマイルエネルギー、つまり笑顔の三つが必要なのじゃ。しかしこの三つは、今この時代にはない。だから……」

鉄矢博士がそう言いかけた時、恵一が、

「時代ということは、つまりタイムマシーンか何かで過去へ行くということですか博士」

「恵一君するどい。そういうことだ。おまえ達三人に過去へ行ってもらって、この三つを取ってきてほしいのだ。そのために、この五人乗りタイムマシーンを開発したのじゃ」

「五人乗りってことは、あと二人乗れるってこと？ 友達をよんでもいいですか」

「う、うん……。まあな」

それを聞いた一志は、同級生の由紀と千秋を呼んでわけを話した。そうしたら、二人はにっこりとして言った。

「いいわよ。いっしょに地球を救いましょう」

「よし決まりじゃ。行き先は二〇〇八年。七十才のわしが、十二才の時。つまりおまえ達と同じ年の時だ。多分力を貸してくれるだろう。住んでいた住所を書いておいた。必ず連絡をとって、会うんじゃぞ」

「わかりました、博士。ぼく達、しっかり使命を果たしてきます」

「うむ。いい意気込みだ、優太君。そうだ、スマイルエネルギーを入れておくスマイルボックスを渡しておく。それとペットボトルと木を小さくして入れておけるツリースモールボックスも渡しておく。このわしに代わって、使命を果たしてくれ。五人組よ、地球の未来はおまえ達にかかっている」

「分かったよ、じいちゃん。で、どうやって動かすんだ」

「このボタンを押して、行き先の年を選んで、この赤いボタンで出発だ」

「わかった。こことここをポチポチッとしてから……。よし、準備完了だぜ、じいちゃん」

「よし、行ってこい。地球の救世主よ」

そして、一志が元気よく、

「みんな行くぞー」

そう言いながら、赤いボタンを押した。五人が鉄矢博士の前から一瞬にして消えていった。まさに光のように……。

こうして、かれら五人の地球を救う冒険が始まったのだ。この先、いったい何が待っているのだろうか……。★

タイムマシーンが急に止まった。ついに二〇〇八年に着いたのだ。タイムマシーンから降りると、タイムマシーンがふっと消えた。

五人組は二〇〇八年の地球にびっくりしてしまった。それは、走ることができたり、酸素マスクをつけたりしていないからだ。一志が言った。

「とっ、とにかくじいちゃんを探そうぜ」

「あっ、忘れてた。よし、手分けしよう」

と恵一が言った。そうして手分けして探してもまったく見つからない。五人は皆落ち込んでしまった。

「あっ」

と大きな声を出した由紀に、みんなも（あれだあ）と思った。そう、一志のじいちゃんがついに見つかったのだ。

一志が近寄って事情を話すと、小さいころから気のいいじいちゃんは、

「協力してあげようかな。何か面白そう」

と、すんなりOKしてくれた。

早速三つのいるものの話をした。じいちゃんは、

「木は南町十丁目にあるよ。井戸は南町十一丁目のおくにある。それから、スマイルは五人のスマイルでいいと思うよ」

と言った。

じいちゃんもあわせた六人は早速、南町へ行った。じいちゃんこと鉄矢は案内係だ。鉄矢に連れて行ってもらい、木のある十丁目に来た。そこには小さな森があった。小さな森の責任者のような人がいた。六人はその人に事情を話し、木を切る許可をもらい、ツリースモールボックスに木を入れていった。六人はとても疲れていたけど、未来の地球のためにがんばった。入れ終わるとお礼を言い、南町の十一丁目に行った。

次は井戸水だ。しかし鉄矢は井戸水があるとは聞いていたが、どこにあるかは知らなかった。十一丁目を歩いてさがしたが井戸はなかった。

夜になったので五人は鉄矢の家に泊めてもらうことにした。そこで鉄矢のお母さんに井戸水の場所を聞いた。すると鉄矢のお母さんは、

「この町は、水道から出る水は井戸からくんでいるの。だから水道の水が井戸水だよ」

六人はびっくりした。あわててペットボトルに水を入れた。六人は、あと一つ、スマイルだけだと思うと力がぬけ、一日目の疲れが出て、夢の世界へ入っていった。

翌朝、日の出の頃、皆は目を覚ました。

一志が異変に気付いた。

「どうした、恵一。顔色が悪いぞ」

恵一は何か思い詰めていた。

「一志、変な夢を見たんだ……。この計画が失敗して、地球が減びてるっていう……」

「何言ってるんだ、恵一。そうならないためにもおれたちが地球を救うんだろ」

「そうだよ、恵一君。不安なことを考えるだけじゃ、前に進めないよ」

「恵一、"地球を救う"今はそれだけを考えろ」

「さあ、皆で地球を救いましょう」

恵一は、

「ーうん」

と力強く返事をした。

そして一行は外に出た。

「じゃあ、始めるよ」

スマイルボックスが中心になるように五人は輪になった。

優太は無言で空を見上げた。太陽は生き生きと光を放ち、その周りの空は青く澄み切っている。こんな光景を久しぶりに見る。そう優太は思う。それも当然なのだろう。優太らがいた時代は地球温暖化が進み、植物も海も大地も人も全てすさんでいた。だから優太は、

「みんな、おれはこの時代はすごいと思う。この時代、空は明るい。この時代の植物はとてものびのびと成長している。この時代の人たちはとてもいい人たちばかりだ。鉄矢博士……じゃなくて、鉄矢も母さんもおれたちの事を何も疑わず受け入れてくれた。だから俺たちの時代もこんな風にあってほしい。だから……」

「ああ、そうだな」

そう言ってから一志は、

「じいちゃんじゃなくて鉄矢、君も一緒にやらないか。人数が増えたって困るわけじゃないから」

「――うん、やろう」

「せーのっ」

――みんなは笑った。

全ての材料が集まり、五人は鉄矢と名残惜しげに分かれ、帰っていった。

鉄矢博士に材料をわたし、機械を作動させた。心地よい音楽が流れ、地球全体を浄化していった。

こうして地球は救われた。彼ら五人、いや六人の手によって。そして地球はまた新しい未来をむかえるのだ。